

戦史部勤務時代を顧みて

上智大学教授（軍事史学会会長） 高橋 久志

私が防衛研修所戦史部教官（助手）として勤務を開始したのは、昭和 57(1982)年 4 月である。「戦史叢書」の完結は昭和 54(1979)年で、その間戦史室から戦史部に組織が拡大され、場所も市ヶ谷台から目黒に移った。そして、旧軍関係者と自衛官だけだった戦史編纂官に、初めて文官助手として、防大を経て慶大大学院で学んだ波多野澄雄氏（現筑波大教授）が加わった。そして、翌 55 年には、同じく慶大から赤木完爾氏（現慶大教授）を迎え、丁度私が文官の 3 人目であった。

当時の記憶を辿って最も強烈な印象は、六本木の本庁で 1 ヶ月の研修を受けていた際、戦史部主催で、元図書館裏の庭で花見の宴会に招待された時のことである。花曇りで時折突風が吹く中を、折り詰めのお弁当を砂が入らぬように包み紙で覆い、皆で一升瓶を回しながらの和気藹々の雰囲気であった。私としては、それまでの研修が座学に加え、各自衛隊の駐屯地や基地での実地体験で毎日が緊張の連続だったが故に、そうした和やかな雰囲気に深い感動を覚えずにはいられなかった。しかも、梅博前戦史部長を中心に一同が車座となり、梅氏に対しては誠に恭しい態度で「閣下」、と皆さんが呼びかけたのには、さすがに吃驚した。

戦後の団塊世代に属する私が、「閣下」という言葉を聞いたのは、実に生まれて初めての体験であった。それは通常は映画や小説の中で、将軍や勅任官の文官に対してのみ使われる敬称であり、敗戦を境に戦後の日本では「死語」に相当するもの、とっていた。しかも、「閣下」という表現が、桜花爛漫の中で無礼講の宴会とは言え、きびきびしいかにも軍人らしい口調で語られたのである。当時の戦史部は史料班に「戦史叢書」を執筆した旧帝国陸海軍軍人の一部がまだ残っておられ、また、現役自衛官も陸上が多く、一種独特の雰囲気が漂っていた。「閣下」という表現が日常使われても、別に不自然ではない所以である。

本庁での研修終了後、引き続いて 1 ヶ月間、所内研修があった。その間、私は史料班付きとなっていた。入所当時の戦史部では、小岩井千里戦史部長をヘッドに、岩島久夫第一戦史室長、野村實第二戦史室長の陣営であった。

さてそこで研修だが、まず研究部では、各室長からマンツーマンで指導を受けた後、戦史部ではかなり徹底した研修があった。その時特に「戦史叢書」の執筆に当たった調査員の先生方には、戦史史料と史料庫の使い方について、懇切丁寧な解説と指導があり、これが非常に役立った。

当時の調査員は、市来俊男、森松俊夫、近藤新治、生田惇、吉松正博、名和田雄他の諸先生であったが、各先生方には随分と可愛がられ、いい思い出を沢山頂いた。特に森松先生には、研究分野が近かったこともあり、何かとアドバイスを頂いた。また、史料班は特に結束が固かったとの印象が強く、自衛官の久保さん（久保幸男 2 等陸尉）が付幹部として準備した自称「うどん会」を開催し、山盛りのうどんを囲んで会話が大きい弾んだ。

当時の戦史部は「戦史叢書」の刊行を完結し、執筆者だった旧軍関係者の大半が退職し、残る一部も毎年のように戦史部を去っていく状況にあり、まさに世代交代が急速に進展していく変革の時代にあった。そして、「戦史叢書」の誤字誤植や事実関係の訂正という作業が残ってはいるものの、防衛庁における戦史部そのもののあり方や新しい研究分野の模索、並びに研究者の育成など、組織全体として様々な問題を抱えていた。

しかし、戦史部全体の雰囲気は格段に明るく、自衛官の方々も、調査員の先生方に負けず劣らず個性的な方が多かった。中東戦争の専門家で退官後に『修身』の編集に携わった田上四郎氏、防衛大学校校歌の作詞者だった田崎英之氏、新聞記事の記録や大日記類等のコピーと整理に必死に取り組んでいた有賀傳氏、着々と業績を積み上げていた原剛氏・中山隆志氏・熊谷光久氏等々。熊谷さんは一室の企画幹部であり、随分とお世話になり、居合道の手ほどきまでしてもらっている。外国戦史班長の糸永新氏やロシア語に長じていた小林康男氏も、忘れられない方々である。その他、史料班の中国畑だった高田甲子太郎氏と大砲専門の平山貫起氏も、お元気であった。

当時の戦史部は組織が一致団結し、常に活気が漲っていた。それには「戦史叢書」102 巻完結という「快挙」から生まれた自信が、背景にあったに違いない。所員集会室では、熱心に新聞に目を通していたり、研究テーマや問題点をめぐってお互いに相談したり、大先輩の調査員にアドバイスを求めたり、あるいは、時には口角泡を飛ばして議論に夢中になっている姿が目撃された。また他方、電話でレファレンスに答えたり、問い合わせを熱心にしたり、戦史部所員は皆多士済済で、毎日がなかなか賑やかであった。

業務班の反対側の応接室では常に訪問客があり、私はここでインタビューをしばしばやらせてもらった。更に、3 階の一室は「梁山泊」と見まがうばかりの部屋で、ここには加登川幸太郎先生が毎日詰めており、一心不乱に本を読んだり、自然に回りに集まる所員が発する様々な質問に、説得力豊かに丁寧に答えていた。桑田悦先生もよく姿を現し、ある時などは両手の指先に絆創膏を張り、そこにアルファベットが書いてあり、ワープロ習得のため、文字の配列を記憶しようとしているとのことであった。こうしたお二人の研究に対する凄まじいばかりの意欲は、周囲に伝わらないはずはなかった。

この部屋には元調査員で、私が個人的に大変お世話になった今岡豊先生とか、陸士同期の井本熊男先生なども、よく顔をお見せになっていた。そうした先生方の周りには必ず所

員の何人かが集まり、活発な質疑応答が行われるのが常であった。

当時は旧軍関係者に対するインタビューが頻繁に行われ、やがて末国正雄先生や加登川先生の講義も開始されることになった。他方、日本陸軍研究で世界的な権威者の Alvin D. Coox 博士 (San Diego State University) が奥様を伴って毎年のように客員研究員として滞在し、講義を行ったり質問に答えたりして、所員の皆さんに大きな刺激となっていた。なお、「戦史研究発表会」が7月の末に2日間にわたって開催され、戦史部所員の研究を外部に向けて発信した。毎年講堂が人であふれんばかりであり、お年を召した旧軍関係者が何人も参加され、熱心に質問したり、所見を開陳した。特に大井篤氏や杉田一次氏他のお元気な姿が、今でも臉に浮かんでくる。また、「戦史研究発表会」で発表する所員は、当時は必ず事前に調査員の先生方の指導を受けていたものであった。

もう一つ、戦史部特有の催し物があった。それは戦史の現地研究であり、毎年テーマを違え、実際に戦跡を巡って徹底的に研究したものであった。例えば硫黄島や沖縄の研修は、我々文官にとり、随分と勉強になった。そのための事前研修には、まるまる1週間朝から夕方まで、兵棋研究室に缶詰になって取り組んだ。そして、現地では大きな地図を両手で広げて地形を観察したり、戦闘の様態を実地検分したものであった。また、バス一台に乗り込み、「水際撃滅作戦」の現地研修に出かけた際には、乗車中全く休憩もなく、激しい議論の応酬があったのをよく覚えている。

また、当時の戦史部は軍事史学会との関係も深く、学会誌である『軍事史学』の編集は波多野さんを中心にして行われており、その後、土谷一郎部長時代には、戦史部全体が一丸となって学会の運営に取り組むこととなった。更に、戦史部は「日米戦史交換研究会」(MHX)にも当初から熱心に参加しており、私の場合、最初からこれに関わっていた。

閑話休題。「戦史叢書」について、一言最後に触れてみたい。これまで様々な評価や鋭い批判が寄せられてはいるが、主として(1)刊行当時の利用可能な史料の状況、(2)研究の実態、並びに(3)執筆者が全て旧軍関係者であり、歴史の専門家としての訓練が十分ではなかった、(4)脚注の不備、(5)戦争そのものに対するアプローチの当時の限界等ということを勘案しても、資料的価値から言って、「戦史叢書」はわが国にとり「金字塔」に相当する、と確信する。もう二度とあのような国家的事業は、不可能であろうし、あのような規模で、様々な人材を防衛省や自衛隊関係者のみで集めることは、無理というものであろう。

もちろん、軍事や軍事用語に不案内な素人にとって、これらを十分に理解したり、使いこなすには、なかなかの苦勞が必要である。ましてや難解な日本語と専門用語に取り組まなければならない外国人研究者の果たして何人が、使いこなせるだろうか。アメリカ人研究者で当時博士論文を執筆していた者が、通訳者の手助けを借りて日々格闘したのを、私は

耳にしたことがある。しかしながら、「戦史叢書」は、旧日本帝国陸海軍の研究者が、いずれにしても参考にせねばならぬのであり、その古典的価値は 30 年後の現在も少しも減じていない、と確信する。

そうなると、今後の研究という視点から、「戦史叢書」の延長線上を考えると、通史という観点だけでなく、分野別の視点からの研究が重要性を帯びてくるに違いない。それも、グローバル化の時代にあっては、出来るだけ英語を使用した形での研究叢書のような出版が良かろうと思う。もちろんそれには、部外者の協力と活用が喫緊となるであろう。しかも、大東亜戦争だけでなく、日本が従事した戦争や武力衝突に到るまで、更に、日本が間接的に関わった戦後の国際紛争にまで、研究が及ぶことが望まれよう。

例えば、「大日本帝国」が完敗した（1）政戦略、（2）情報、（3）兵站、（4）戦時経済、（5）人事行政、（6）軍隊教育、（7）同盟関係、（8）国際世論、（9）捕虜の問題、そして（10）紛争（戦争）終結過程などが思い浮かぶ。他方、通史としては、日米戦争の開戦経緯について、これまでの国内外の研究状況を十分反映して、英文で江湖に問うことが必要であろう。